

## 私の「お宝」

旭川市医師会  
平澤循環器・内科クリニック

平澤 邦彦

「えー！たったの5,000円ですか？」

「はい、残念ながら、これは贋作です。江戸時代末期に書かれた本物でしたら200万円は下らない価値もありますが、今回お持ち込みいただいた作品は筆の運びも粗く、正真正銘の模造品です。骨董品をたくさん収集されたお父様の形見の品ですから、貴方の「お宝」として自宅の床の間に大切に飾ってください」

ニタニタ笑いながら『開運なんでも鑑定団』のテレビ番組を見ていたが、ふと私の「お宝」は何だろうと考えてみた。例えば100年以上経った古いモノとか…？

すぐに思い出したのは、祖父の形見の卒業証書だった。明治新政府重鎮で政界を下野後に早稲田大学総長となった大隈重信伯爵から私の祖父へ直接授与された大学卒業証書だ。授与された日付は1914年2月11日と106年前だが、金銭的価値は全く無く、「お宝」とはいえない。残念！

もっと「お宝」にふさわしいモノを探そうと、滅多に覗いたことのない引き出しの奥を物色してみた。すると小学生だった私のために、父親が知人の郵便局員に頼んで56年前に作った『1年分の新発行記念切手を1枚ずつ並べた切手帳』が現れた。切手帳の中には1964年の東京オリンピックの記念切手がずらりと並んでいるが、多くの収集家が持っている代物なので、そう価値が高いものではない。残念！

この切手帳の隣にもう一冊の風変わりな切手帳があった。中を開けてみると、びっしりと外国の使用済切手が並んでいる。すっかり忘れていたが、この切手帳は私が1983年にオーストラリアのシドニー大学へ留学していた時の記念品であった。訛りの強いオーストラリア英語に悩まされながら、やっと英語で2編の医学原著論文を書き上げて1年間の留学を終えて日本へ帰ることとなり、医局の同僚が送別会を開いてくれた時のことだった。Hunter valley wineryのRiesling種vintage wineを飲み過ぎて送別会も終わりに近づいた頃、古株の秘書のナンシーが話しかけてきた。

「クニ(私の愛称である)、あんたは1年間よく頑張ったね。この国で見て・聞いて・味わったものと、総ての経験をあんたのお土産として日本へ持ち帰っておくれ。そして、よかったら私からのプレゼントも一緒に持ち帰っておくれ。これは私が20年かけて集めた使用済切手の詰まった切手帳さ。一人娘が結

婚して、今朝この街を出て行くことになったので、私の大切な切手帳を娘にあげようとしたら、こんな古いものはいらなくて、断られちゃった。クニ、お前さんにこの切手帳を日本まで持ち帰って大切にしてほしいんだよ」

酒に酔って頭の回らない私は二つ返事でその切手帳をもらい、帰国荷物の中に放り込んで持ち帰った。そして37年経ち、ゆっくりこの切手帳を見る日が訪れた。切手帳の1頁目の最上段左端に挟めてあったのは、消印が1901年11月18日の1 penny切手で、発行した国はNSW。なんと発行元はオーストラリアではないのだ。

そこで私はネットでオーストラリアの沿革を検索した。『1770年、スコットランド人のJames Cookが初めてシドニーに上陸したとき、彼はそこをNew South Wales(NSW)と命名した。1855年にはNSW植民地政府が樹立され、1901年1月1日オーストラリア連邦が成立して、NSWは連邦の州の一つとなった。云々』

つまり、この1 penny切手はオーストラリア連邦成立前に印刷されたもので、まだ連邦制度が十分浸透されていない時期に移行期の切手としてNSWの名前のまま118年前に使用されたいい。

「この切手は年代物だし、植民地政府発行の高価なものに違いない」と心の中で私の直感はいちいち叫んでいた。私はさらにネットオークションのサイトに入ってみた。NSW発行で、私の所有するものと全く同じ図柄・同じ色合の1 penny切手を探した。すると、あったあった、見つかった。私の所有する切手と全く同じデザインの使用済1 penny切手は、他種のNSW発行で使用済の切手46枚と一緒にセットになって1,069円の安価でネット販売されていたのだ。私の直感は大ハズレで、この1 penny切手は「お宝」にはなれなかった。残念！

ネットで調べた結果に多少落胆はしたものの、私は気を取り直して「お宝」が何かをじっくり考えてみた。そして当然ともいえる結論に達した。

私と私の家族にとって「お宝」とは、これまで大病に罹らず44年間医者の仕事に勤めてきた『私の健康な身体』であるという至極当たり前の結論だ。私の「お宝」をもうしばらく磨き上げ、大切に使用して、いずれは自他共に認める我が家の人間国宝へ格上げさせようと思う。